加治木の太鼓踊りの特異な芸態

― 秀吉の朝鮮出兵による芸能への影響 ―

吉川周平

東日本の鹿踊りに対し，西日本の太鼓踊りと言われ，九州では多種多様の太鼓を打つ舞踊が見られるが，それらは〈太鼓のマイ〉[注1]と〈太鼓のオドリ〉[注2]に二大別することができる。

前者は，熊本県荒尾市の〈風流〉を頂点とし，福岡県柳川市の古賀，今古賀，藤吉の各〈風流〉から，佐賀県の〈浮立〉につながる太鼓を打つ舞で，舞楽の大太鼓を打つ所作から発展してきたもの[注3]と考えることができる。

後者には，注3の④～⑩のような多種のものがあるが，九州の〈太鼓のオドリ〉の中核をなすのは，注3の⑦の〈楽型〉の太鼓踊りである。

ところで，鹿児島県姶良郡加治木町の太鼓踊り[注4]も，〈楽型〉の太鼓踊りの一種だが，その芸態には，次のような特異な点が見られる。

イ．太鼓を打つとき，左足を上げて右手の撥で打つなど，ナンバでない動作がある。

ロ．太鼓打はツリ人形のように動けといわれるように，身体をひねる動作をしない。

ハ．鉦打4人が横一列で左まわりに，太鼓打は縦一列で右まわりにまわったりするなど，陣形の変え方が独得である。

以上のような特異な動きは，加治木の太鼓踊りが属す〈楽型〉の太鼓踊りには見られず，日本の太鼓踊りの伝統にはない異質な動きと言わねばならない。

加治木の太鼓踊りの起源は，秀吉の朝鮮出兵に参加した島津義弘（1535～1619）が，江戸で駿河の念仏踊りを見て，配下の侍に作らせたものという。しかし，現在の遠州の大念仏には，イ～ハのような動きの要素は見られない。

義弘が隠居した加治木には，竜門司焼という朝鮮からの帰化陶工による朝鮮系の陶芸が伝承されているが，加治木の太鼓踊りの前に演じられる「吉左右踊り」という棒踊りを仕組んだ風流が，島津軍と朝鮮軍とに扮しての風流であり，鹿児島県内から，義弘が朝鮮への途次滞在した肥前に至るまで，加治木の太鼓踊りと同様なものが見られない[注5]ことなどから，加治木の太鼓踊りに見られる特異な芸態は，朝鮮で接したものを摂取してはじめて創始できたものとしか考えようがない。

また，加治木の太鼓踊りの細長い撥，朝鮮の三拍子が日本風に四拍子に変化したようなリズムなどは，とくに朝鮮的と見られる。ただ，朝鮮でもナンバでない舞踊はあまり見られない[注6]ことから，朝鮮軍あるいは明軍の軍楽のようなものの影響も受けているかも知れないが，国内に類を見ない加治木の太鼓踊りの特異な芸態は，秀吉の朝鮮出兵による芸能に対する異国の文化の影響によるものであることは間違いないであろう。

注1． この太鼓を打つ〈マイ〉の動きの特色は，旋回・水平運動・直線的に移動するだけのときは上下動のない滑な動き・足を地面や床から上げない・抑制された幾何学的な動き・拍子に動きを合せることを意図しないことなどである。

注2． 太鼓を打つ〈オドリ〉の動きの特色は，跳躍・垂直運動・上下動をおさえて水平運動化しても拍節に合せた明確に区切った動きで組立てている・足を地面や床から上げて動く・抑制しないダイナミックな動きなどである。

注3． 太鼓を打つ芸能は，次のように分類して考えると，種々のことが見えてくる。

A．大道具的太鼓……据えた大太鼓を打つ。

① 舞楽型……大太鼓の片面に向って立ち，太く短い二本の撥で，間遠に打つ。大太鼓を打つ風流に発展する。

② 神楽型……床に置かれた太鼓を細長い二本の撥で，連続的に打つ。太鼓打はあくまでも囃子方で，神楽では撥を採物として舞う「撥の舞」以外は座して打つのが特色で，太鼓を打つ舞踊としては発展しない。

③ 山車型……山車などにのせて，移動させながら，太鼓を打つもので，②同様囃子の太鼓だが，太鼓が露出している場合，打つ所作に見せる要素があるものもある。

B．小道具的太鼓

Ⅰ．太鼓を手に持って，打つもの

④ 念仏型……小太鼓を左手に持ち，鉦などと合せて，一本の撥で打つ。

⑤ 拍子物型……太鼓持ちが持つ小太鼓を，他の一人が，上に向けられた片面を，二本の撥で打つ。

Ⅱ．太鼓を身体につけて，打つもの

（ｉ）太鼓を身体の前部につけて，打つもの

⑥ 稚児舞楽型……子供が羯鼓（小太鼓）を胸につけて，二本の撥を直線的に動かし，両面を打つ。跳躍性は少なく，〈マイ〉に属す。襷をせず，御幣を背負わない。

⑦ 楽型……大人が胸につけた太鼓の両面を，二本の撥で打つ。⑥の羯鼓が比較的静かな音なのに対し，大きな音を出し，雨乞いや虫追いに用いられたりする。典型的な太鼓踊りで，跳躍性に富み，陣形をさまざまに変えたり，移動性に富む。襷，御幣をつける。

⑧ 田囃子型……⑦に類似するが，田の中で打つため，移動性は少ない。二本の撥で片面ずつを打ちかえたり，撥を抛り上げたり，曲芸的な打ち方で，撥の動きを派手に見せる。

⑨ 田楽型……⑦と類似し，陣形を変えておどるが，⑦と異なり，小鼓，ささら，銅鈸子，笛などを伴なう。平べっ

たい大太鼓を，二本の撥で，比較的静かに打つ。

（ii）太鼓を左脇にかかえて，打つもの

⑩ 沖縄のエイサーの大太鼓型……左手を太鼓の胴に巻き，片面を一本の撥で打つ。

以上注3の太鼓の芸能は，②③の囃子の太鼓をのぞき，依代の相違により二大別できる。

㋑ 笠をつけるもの……顔をかくし，仮装の意識がある。①④⑤⑥⑧⑨⑩

㋺ 御幣等を背負うもの……非念仏系で，本来は仮装でない。⑦

注4．この太鼓踊りについては，『鹿児島県文化財調査報告書』8（昭和36年3月）に真鍋隆彦氏の「吉左右踊　太鼓踊」と題す論考がある。

注5．鹿児島県下に太鼓踊りは130以上あるが，次のような地域的な芸態上の特色が見られる。

① 本州的太鼓踊り（やすらい花のように手太鼓を持つ。市来の七夕踊りの太鼓踊りなど。）

② 九州的太鼓踊り（注3の⑦の楽型の太鼓踊り。九州には無数にあるが，沖縄にはなく，愛知以北にも見られない。）

③ 沖縄的太鼓（注3の⑩のもので，出水郡東町鷹巣の種子島踊りなど。）

④ 異国的太鼓踊り（加治木の太鼓踊りで，朝鮮的太鼓踊りというべきものかも知れない。）

注6．『荀子』巻第十議兵篇第十五の四に「聞鼓声而進，聞金声而退」とあり，太鼓の音で進軍し，鉦の音で退却するという，戦国時代の中国の軍楽が知られる。

執筆者紹介

松本　千代栄（お茶の水女子大学）
香山　知子（兵庫教育大学）
板谷　　徹（早稲田大学）
厚母　宗子（お茶の水女子大学）
桑原　和美（お茶の水女子大学）
佐々木　昌代（お茶の水女子大学）
平井　タカネ（奈良女子大学）
畑野　裕子（奈良女子大学）
堀野　三郎（長崎大学）
大島　　敏（福井大学）
富田　美智代（福井大学）
三反崎　康子（福井市燈明寺中学）
片岡　康子（お茶の水女子大学）
一柳　康子（お茶の水女子大学）
丸子　睦美（日本大学）
葵　　妖子（舞踊家）
山田　敦子（東京女子体育大学）
上林　澄雄（評論）
近藤　英男（近畿大学）
富士波　雄三（舞踊家）
丸茂　祐佳（日本大学）
吉川　周平（鹿児島女子大学）